

弥三郎夫婦

「女房、今帰ったぞ……」

「まあ、あんた。随分と遅くなりましたなあ。何か、変わったことでもありましたか」

「いや、変わったことはなかった。ああ腹がへった。女房、飯はないか……」

「おかしなことを訊きますねえ。飯がないかって、いつもいつも晩飯は。あんたが漁から帰って一緒にしているではありませんか、少しぐらいは遅いからとて、私がまつておらないとも思いましたか……」

「これはこれは、女房殿にはえらい剣幕でござるな、あやまる、あやまる、では飯にしよう」

「はいはい、ほうら支度はとづくに出来ておりますよ、ほうら」

「痛い、いたい、いたい」

「どうなさいました」

「ああ、腹が痛くなった。急に腹が痛くなったので、飯はお前一人だけたべなさい」

「まあ、いやなこと。腹がへつたといったり腹が痛くなつたといったり、一体どつちが本当なんです」

「両方とも……………」

「嘘なんでしょう……………」

「いや両方とも本当だ……………」

「どういたしましたして嘘だと顔に書いてありますよ……………」

「馬鹿なっ」

「あんたがいい出すまではだまつていようと思つておりましたが、今晩急に庄屋殿からおふれがありました。その使は今さつき帰つたばかりでございます」

「で、おふれというのは一体どんなことであつた」

「それは、本日鎌倉より日蓮という流人があつた故、かくまつては相ならぬ。情けをかけては一切相ならぬという、きつい、おふれでありました。日蓮という坊さんは、南無妙法蓮華経と唱えるから、すぐわかる、そしてよその宗旨を悪くいう悪坊主であると申しております」

「あんな立派なお坊さんを、そんなことをいつておるのか、馬鹿なっ」

「おやつ、あんたは日蓮という坊さんをしておるのですかい」

「なんでおれが知ろうか。この年になつてもまだ鎌倉をみたことがないではないか」

「でもあなたは今、あんな立派な坊さんといったではありませんか」

「そんなこと知らぬ、俺がいう筈がない」

「あなたは、私にかくしておることがありますねえつ、いって下さい。どうしたんですか」

「夫婦の仲というものは、どうしてこんなに嘘がいえないものかなあ、いまましい。女房その飯櫃を俺にくれい」

「ええつ」

「面倒くさい、その飯をなあつ、握り飯にしてその桶に入れて俺に呉れいっ」

「そしてどうします」

「俺はなあ、それをもつて一寸下の岩屋までいってこねばならんだよ、なんにもいいなさんな」

「では、あなたは、日蓮とかいう坊さんを」

「そうなんだ、今日は母親の命日、殺生はいくら漁師でもやめようと思ったが、今日の潮かげんを眺めると、どおしても篠見ヶ浦まで船を出したくなってしまった。たいした漁のないのも今日は却って功德を積むものと、自分にいいきかせながら、鳥崎の鼻を廻ると驚いた。大きな坊さんが海からでも涌いたかと思うようにあのまな板岩につつ立っているではないか、俺はびつくりして訳もきかずに船に乗せると、早速に汐をかわしてこいで逃げたが、今一寸おそれればあ坊さまは魚の餌よ。それがお前のいう坊さんだったのだ。自分から鎌倉の流人日蓮と申すと正直に

いわれた。伊東から三里も離れた篠見ヶ浦を伊東だと役人は嘘をつき、何処にもゆくことの出来ぬまな板岩をこれから磯つづきにゆけばすぐ伊東だと、だまして捨てていったらしい。いくら役人だといつてもすることがひどい。俺はどうしても日蓮という坊さんをかくまう気だ。女房どうだ、お前はいやか」

「……………」

「返事のないのは不承知と思うがどうだ。そりゃあ五月で米も心ぼそい時に、あのでっかい坊さんを養うのはなかなか骨だ。俺も最初は舟をつけたら、すぐ何処かにいつて貰うつもりでおったが、一寸の間船にのせていただけの時間なのに、もういけねえ、あの坊さんになんというのか、ほれてしまったんだ。お前には内緒で、俺の飯をはこびたかったんだが、面倒くさいので白状してしまった。どうじゃ女房、米の飯がおいしいか、それとも有難い坊さんを助けるか、早く返事をしてみろ」

「まあ、あんた、そう息せききつていわなくてもようございます。あなたがその気持なら私もあなたの女房、一緒になって、その日蓮とかいう坊さんを助けましょう。これも前世の約束というものでしょう。さあ握り飯を握るから、あんた早く持つていつて上げて下さい。さぞお腹がすいているでしょう」

「ああ、それを聞いたら俺も急に腹がへった。俺にも少し食わしてくれい……………」

「そんな気持では人は助けられませんか。生つばでも呑んでいらつしやい。握り飯をこしらえて、残りがあつたら、あんたにも上げましょう。それも、その日蓮さんとかいう坊さんに握り飯をどけてからのことですよ」

「えらいことになってきたわい。女房、人を助けるといふことは腹がへるもんだなあ……」

